

紫式部と源氏物語の和歌から

―百人一首の歌と紫の上との関係で―

津久井 勤

一、はじめに

紫式部（小倉百人一首五七番歌）はご存知のように、源氏物語の作者である。和泉式部と同じ中宮彰子に仕えている。ただ、宮仕え前の生き方が、和泉式部のように貴公子との大恋愛といった華やかなものではない。また、宮仕え後の生き方も極めて控えめな存在である。歌合せなどへの参加もない。中宮彰子の親王の教育係の立場で、父から得た漢詩の素養や源氏物語執筆の実績を踏まえて道長から信頼されている。

ところで、紫式部が源氏物語を書いたと見られるよりどころは、紫式部日記（一〇〇八年十一月一日）に次の記事が見えることである。

「左衛門（藤原公任）の督、あなかしこ、このわたりに、わかむらさき（源氏物語五 若紫）やさぶらふ」と、うかがひたまふ。源氏に似るべき人も見えたまはぬに、かの上（紫の上）、まいていかでものしたまはむと、聞きみたり。」

ほかにも紫式部日記には源氏物語について述べていると思われる記事が各所に見える。このことから作者が紫式部との根拠になっている。

源氏物語は一般に言われている源氏の多情な恋の遍歴の物語と見られなくもない。しかし、見方を変えれば、因果応報の物語と見られ、困難な目にあつてもそれに従つて新たな境地を開いていることが伺える。

ここでは、紫の上との出会いから源氏の和歌の応答と、彼女が亡くなった後、源氏の回想を通して源氏物語の一面を見たい。

二、紫式部の経歴

紫式部は他の多くの歌人同様、宮仕えの期間や、歌合せに登場するなどが無い限りその年代的な把握が難しく、生没年未詳である。その中でも、生まれた年として天禄元年（九七〇）と天延元年（九七三）の説がある。亡くなった年はもつと隔たりがあり、長和三年（一〇一四）と長元四年（一〇三一）などである。

父は正五位下越後の守為時、冬嗣の子良門の子利基の流れである。この中に、百人一首二七番歌の兼輔がいる。母は同じく冬嗣の子長良の流れで、摂津守為信の女であるが早くに亡くしている。夫になる宣孝は、父と同じく良門の子高藤の流れで、百人一首二五番歌三条定方がいる。

ところで、紫式部日記の中に、「この式部の丞といふ人の、童にて書讀に侍りし時、聞き習ひつゝ、かの人をはそう読み取り、忘るゝ所をも、あやしきまでぞさとく侍しかば、書に心入たる親は、『口惜しう。男子にて持たらぬこそ幸いなかりけれ』とぞ、つねに嘆かれ侍りし。」の記事が見える。こうして漢詩の素養も幼い頃から見られる。

父は花山天皇に東宮時代から仕えているが、天皇が二年たらずで讓位を余儀なくされ、退位とともにその後十年あまり官職を失くしている。そうしたこともあつてか、紫式部のその後の経緯は不明である。

長徳元年（九九五）頃から宣孝と交際が始まったと見られている。翌年には父が越前守として赴任しているので、これに伴つて同行し、一年ちよつと越前（現在の越前市武生）で過ごしている。その縁で、昭和六十三年から毎年この地で源氏物語アカデミーが開かれている。

話を元に戻して、紫式部が京に戻ったあと引き続き宣孝と交際を始めて結婚する。まもなく賢子（後の大式三位「百人一首五八番歌」）を生む。長保三年（一〇〇一）四月二五日には宣孝が亡くなり寡居生活に入る。ただ、この間に、後に和泉式部の夫になる保昌と短期間ではあるが交際していたとの記録も見られる。

寛弘二年（一〇〇五）十二月二九日に命婦を命じられ中宮彰子に仕える。この寡居生活から出仕までの期間に「源氏物語」のかなりのところが書き上げられていたと見られている。

当初は宮仕えを嫌いあまり出仕しなかったようだが、寛弘四年には掌侍に昇進してからは出仕を途絶えることはなかったと見られる。この背景には紫式部が源氏物語を書いているとの噂を聞きつけた道長の強い要請があり、尊卑分脈には「道長の召人」「御堂関白妾（しよう）」（道長は関白には就任していないが）と示されている。

その後は中宮彰子に従って、住まいの移動に伴ってこれに随行している。寛弘八年（一〇一一）六月一条天皇が譲位し上皇に、三条天皇践祚される。暫くして一条上皇の崩御があり、皇太后彰子となられたが、引き続きお仕えし、併せて敦良親王の養育に当たる。このとき、紫式部は四十歳になっている。しかし、その後の動静はよく知られていない。

三、紫式部の和歌

①紫式部集の最初の歌が百人一首五七番歌の和歌であるので、これの紹介から始める。

早うより童友達なりし人に、年頃経て行きあひたるが、ほのかにて、文月十日の程に、月にきほひて帰りにければ

・めぐりあひてみしやそれともわかぬまに雲隠れにし夜半の月影（かな）

新古今集卷十六雑上一四九九

その人、遠き所へ行くなりけり。秋の果つる日来てある、暁に蟲の声あはれなり

・鳴きよわる籬の蟲もとめがたき秋の別れや悲しかるらむ 千載集卷七

離別四七八

②道長との関係

源氏物語、御前（中宮彰子）にあるを、殿（道長）御覧じて、例のすゞ

る言ども出で来るついでに、梅の下に敷かれたる紙に書かせ給へる。

・すき物と名にし立てれば見る人の折らで過ぐるはあらじとぞ思ふ

とて、たまはせられたれば

・人にまだ折られぬ物を誰かこのすき物ぞとは口ならしけむ

渡殿に寝たる夜、戸をたゞく人ありと聞けど、恐ろしさに、音もせで明かしたる翌朝（つとめて）

・夜もすがら水鶏よりけになくも真木の戸口をたゞきわびつる
返し

・たゞならじとばかりたゞく水鶏ゆるあけてはいかにくやしからまし
参考歌 拾遺集恋三 八二二 よみ人知らず

・叩くとて宿の妻戸を開けたれば人もこずゑの水鶏なりけり

三、紫の上関連の物語概要

紫の上との出会いは、源氏物語の中で、「若紫」から出てくる。源氏（十八歳）が瘡病（わらはやみーマナリヤに似た発熱する病氣）で加持を受けるために北山に赴く。その折、たまたま見下ろせるところに祖母の北山の尼君とともに住まいしていた幼女（紫の上・十歳頃）を見かける。この幼女は憧れの桐壺帝の藤壺中宮の姪で、藤壺に似た面影があり、惹かれる。その間に、藤壺が病氣療養で里帰りしている折、源氏と結ばれる（その子が後の冷泉帝）。一方、北山の尼君が亡くなり、幼女が帰京するが、その途中で、略奪さながらの手段で密かに二条院に迎える。

「葵、賢木」桐壺帝から朱雀帝への御代替り、源氏の正妻葵上が夕霧を出産して亡くなる（六条御息所の生霊か）り、喪が明けた後、紫の上（十五歳）と結ばれる。桐壺院が崩御し、右大臣家の勢力が強くなる中で、その姫君の朧月夜との密会が露見する。

「須磨、明石」朧月夜との密会が露見したことがあって、源氏の官位が

剥奪され、流罪になりかねない中で、須磨に身を引くことを決意する。別れた源氏を慕った紫の上との和歌のやり取りがある。明石では、明石の入道の娘を娶り、紫の上を寂しがらせる。その後三年を経て、都では天変地異が起り、朱雀帝が目の病なども遇って、讓位を決意し、源氏の召還の宣旨が下り帰京する。冷泉、帝位につく。

「薄雲、朝顔」転変地異が続く、太政大臣（前の左大臣）や藤壺が相次いで亡くなる。加持僧が帝に出生の秘密を明かされたために悩む。また源氏も激しく動揺する。藤壺が夢枕に現れ、帝の出生の秘密が漏れたことを恨む。源氏は、成仏を願ひ、祈禱を行わせる。

「初音」太政大臣に就任した源氏が前年に完成させていた六条院（四季の風情をかたどった豪華な屋敷で源融（百人一首十四番歌の作者）の河原院に例えられる。その中で、紫の上を「東南・春」に住まわせる）で新年を迎える。最も源氏にとって晴れやかな時期を迎えていた。

「若菜」朱雀院の病が重くなり皇女 女三宮が気がかりとなり、源氏に降嫁させる。このことで、紫の上の苦悩が始まる。加えて、紫の上が発病し、療養のため二条院に移る。

「御法」源氏は五十一歳になっていた。紫の上は病気がちで、出家を願ったが、源氏は許さなかった。この年の秋（八月十四日）、紫の上は二条院で源氏と明石中宮に看取られてこの世を去った。「幻」では源氏の紫の上への追慕の念で出家の思いを深める。年末に身辺を整理して最後の新年を迎える準備をする。続いて文章のない「雲隠」があり、宇治十帖へと続く。

三．源氏と紫の上との贈答歌を中心に 三．一 「若紫」から

①源氏、北山の尼君と和歌の贈答

尼君「ともかくも、ただ今は聞こえむ方なし。もし御心ざし

あらば、いま四五年を過ぐしてこそはともかうも」とのたまへば、さなむと同じさまにのみあるを本意なしと思す。御消息、僧都のもとなる小さき童して、

源氏「夕まぐれほのかに花の色（紫の上のこと）を見てけさは霞の立ちぞわつらふ」

・北山尼君「まことにや花のあたりは立ちうきとかすむる空のけしきをも見む」とよしある手のいとあてなる（品のある）を、うち棄て書いたまへり。

②翌日、源氏、北山の人々に消息を贈る

源氏「かばかり聞こゆるにても、おしなべたらぬ心ざしのほどを御覧じ知らば、いかにうれしう。」などあり。中に小さくひき結びて、

・「面影は身をも離れず山桜心のかぎりとめて来しかど」

尼君「ゆくての御事は、なほざりにも思ひたまへなされしを、ふりはへさせたまへるに、聞こえさせむ方なくなむ。まだ、難波津（競技かるたの序歌のこと）をだにはかばかしうつづけはべらざめれば、かひなくなむ。さても、」

・「嵐吹く尾上の桜散らぬ間を心とめけるほどのはかなさ」

いとどうしろめたう。

源氏の御文にも、いとねむごろに書いたまひて、例の、中に「かの御放ち書きなむ、なほ見たまへまほしき」とて、

・源氏「あさか山浅くも人を思はぬになど山の井のかけ離るらむ」

・尼君「汲みそめてくやしと聞きし山の井の浅きながらや影を見るべき」

注「万葉集三八〇七「安積香山影さへ見ゆる山の井の浅き心をわが思はなくに」（この和歌と先の序歌は古今集仮名序の有名な歌）とその類歌の古今和歌六帖第二「くやしくぞ汲みそめてける浅ければ袖のみ濡るる山の井の水」（紀貫之）を引く。

③翌日、源氏、尼君に消息、紫の上への執心

またの日も、いとまめやかにとぶらひきこえたまふ。例の小さくて(小さい結び文)、

・源氏「いはけなき鶴(紫の上)の一声聞きしより葦間になづむ舟(源氏)ぞえならぬ」

④尼君亡くなり、源氏、紫上を引取り、手習を教える

源氏「武蔵野といへばかこたれぬ」(古今六帖第五「知らねども武蔵野といへばかこたれぬよしやさこそは紫のゆゑ」を引く)と紫の紙に書いたまへる、墨つきのいとことなるを取りて見ぬたまへり。すこし小さくて、

・「寝は見ねどあはれとぞ思ふ武蔵野の露わけわぶる草のゆかりを」

紫の上「書きそこなひつ」と恥じて隠したまふを、せめてみたまへば、
・「かこつべきゆゑを知らねばおぼつかないかなる草のゆかりなるらむ」

三・二「葵・賢木」から

①祭りの日、源氏、紫の上と物見に出る

源氏「いと長き人も、額髪はすこし短うぞあめるを。むげに後れたる筋のなきや、あまり情なからむ」とて、削ぎはてて、「千尋」と祝いひきこえたまふを、少納言(紫の上の乳母)、あはれにかたじけなしと見たてまつる。

・源氏「はかりなき千尋の底の海松ぶさの生ひゆく末は我のみぞ見む」と聞こえたまへば、

・紫の上「千尋ともいかでか知らむさだめなく満ち干る潮ののどけからぬに」と物にかきつけておはするさま、らうらうじき(子供らしくかわいいい)ものから若うおかしきを、めでたしと思す。

②藤壺との仲に狂乱する源氏、雲林院に参籠、紫の上と消息しあう
陸奥国紙にうちとけ書きたまへるさへぞめでたき。

・源氏「浅茅生の露のやどりに君をおきて四方の嵐ぞ静心なき」などこまやかなるに、女君もうち泣きたまひぬ。

御返り、白き色紙に、

・紫の上「風吹けばまづぞみだるる色かはる浅茅が露にかかるささがに」とのみあり。

三・三「須磨・明石」から

①源氏、二条院で紫の上と別離を嘆く

源氏「こよなうこそおとろへにけれ。この影のやうにや瘦せてはべる。あはれなるわざかな」とのたまえば、女君、涙を一目浮けて見おこせたまへる、いと忍びがたし。

・源氏「身はかくてさすらへぬとも君があたり去らぬ鏡の影は離れじ」と聞こえたまへば、

・紫の上「別れても影だにとまるものならば鏡を見ても慰めてまし」柱隠れにみ隠れて、涙を紛らはしたまへるさま、なほこら見る中にたぐひなかりけりと、思し知らるる人の御ありさまなり。

②源氏、紫の上を残して須磨の浦へ出発

悲しけれど、思し入りたるに、いとどしかるべければ、
・源氏「生ける世の別れを知らで契りつつ命を人にかぎりけるかなはかなし」など、あさはかに聞こえなしたまへば、

・紫の上「惜しからぬ命にかへて目の前の別れをしばしとどめてしかな」げにさぞ思さるらむといと見棄てがたけれど、明けはてなばはしたなかるべきにより、急ぎ出でたまひぬ。

③都の紫の上に明石の君のことをほのめかす

源氏「まことや、我ながら心より外なるなほざりごとにて、疎まれたてまつりしふしぶしを、思ひ出づるさへ胸いたきに、またあやしうものはかなき夢をこそ見はべりしか。かう聞こゆる問はず語りに、隔てなき心のほどは思しあはせよ。誓ひしことも」など書きて、

・源氏「何事につけても

しほしほとまづぞ泣かるるかりそめのみるめは海人のすさびなれども」

とある御返り、何心なくらうたげに書いて、はてに、

・紫の上「忍びかねたる御夢語につけても、思ひあはせらるること多かるを、

うらなくも思ひけるかな契りしを松より浪は越えじものぞと」(古今集

第二十東歌 陸奥歌一〇九三「君おきてあだし心を我がもたば末の松

山波も越えなむ」の本歌取り。百人一首四十二番歌・元輔も同じ)

三・四「薄雲・朝顔」から

①大堰(明石の君)を訪問する源氏と紫の上との贈答

源氏「明日帰り来む」と口ずさびて出でたまふに、渡殿の戸口に待ちか
けて、中将(源氏の召人の一人)の君して聞こえたまへり。

・紫の上「舟(源氏)とむるをちかた人(明石の君)のなくは

こそ明日帰りこむ夫と待ちみめ」

いたう馴れて聞こゆれば、いとにほひやかにほほ笑みて、

・源氏「行きて見て明日もさね来むなかなかにをちかた人は心おくとも」

②雪の夜、紫の上と今昔の物語する

昔今の御物語に夜更けゆく。月いよいよ澄みて、静かにおもしろし。女
君、

・紫の上「氷とち石間の水(紫の上自身)はゆき悩み空すむ月の影(源氏)

ぞながるる」

髪ざし、面様の、恋ひきこゆる人(藤壺)の面影にふと覚えてめでたけ
れば、いささか分くる御心もとりかさねつべし。鴛鴦のうち鳴きたるに、

・源氏「かきつめて昔恋しき雪もよに哀れを添ふる鴛鴦のうきねか」

三・五「初音」から

①源氏の最も輝ける年賀の日、紫の上と

朝のほど人々参りこみて(新年のお祝いに散じた人々)、もの騒がしかり
けるを、夕つ方、・・・乱れたることども少しうちませつつ、祝ひきこえ
たまふ。

・源氏「薄氷溶けぬる池の鏡には世にたくひなき影ぞならへる」

げにめでたき御あはひどもなり。

・紫の上「くもりなき池の鏡によるづ世をすむべきかげぞしるく見えける」
何事につけても、末遠き御契りを、あらまほしく聞こえかはしたまふ。

三・六「若菜・御法」から

①女三の宮との新婚の三日の夜 源氏の反省と紫の上の苦悩

紫の上「みづからの御心ながらだに、え定めたふまじかなるを、まして
ことわりも何も。いづこにとまるべきにか」と、言ふかひなげにとり
なしたまへば、恥づかしうさへおぼえたまひて、頬杖をつきたまひて
寄り臥したまへば、硯を引き寄せて、

・紫の上「目に近く移れば変はる世の中を行く末とほく頼みけるかな」

古言など書きませたまふを、取りて見たまひて、はかなき言なれど、げ
に、とことわりにて、

注―女三宮を巡つての紫の上の苦悩と軋轢の中で、次の歌を踏まえる。

女の貫之に贈る歌「秋萩の下葉につけて目に近くよそなる人の心をぞ見
る」(拾遺集第十七雑秋一一一六)

・源氏「命こそ絶ゆとも絶えぬ定めなき世の常ならぬなかの契りを」

②紫の上小康を得、源氏の気遣い

池はいと涼しげにて、蓮の花の咲きわたれるに、葉はいと青やかにて、
露きらきらと玉のやうに見えわたるを、源氏「かれ見たまへ。おのれ独
りも涼しげなるかな」とのたまふに、起き上がりて見出だしたまへるも
いと珍らしければ、源氏「かくて見たてまつるこそ夢の心地すれ。いみ

じく、我が身さへ限りとおぼゆるをりのありしはや」と涙を浮けてのたまへば、みづからもあはれに思して、

・紫の上「消えとまるほどやは経べきたまさかに蓮の露のかかるばかりを」とのたまふ。

・源氏「契りおかむこの世ならでも蓮葉に玉るる露の心隔つな」

③紫の上、源氏・明石の中宮と歌の贈答の後亡くなる

源氏「今日は、いとよく起きあたまふめるは。この御前（明石の中宮）にては、こよなく御心も晴々しげなめりかし」と聞こえたまふ。かばかりの隙あるをいとうれしと思ひきこえたまへる御気色を見たまふも心苦しく、つひにいかに思し騒がむと思ふに、あはれなれば、

紫の上「置くと見るほぞ儚かなきともすれば風に乱だるる秋のうは露」

げにぞ、折れかへりとまるべうもあらぬ、よそへられたるをりさへ忍びがたきを、見出だしたまひても、

源氏「ややもせば消えをあらそふ露の世におくれ先立つほど経ずもがな」とて、御涙を払ひあへたまはず。

明石の中宮「秋風に暫しとまらぬ露の世をたれか草葉の上とのみ見む」

④秋好中宮の弔問にやつと源氏が返歌

冷泉院の後の宮（秋好中宮）よりも、あはれなる御消息絶えず、尽きせぬことども聞こえたまひて、

秋好中宮「枯れはつる野辺をうしとや亡き人の秋に心をとどめざりけむ今なむことわり知らればべりぬる」とありけるを、ものおぼえぬ御心にも、うち返し、置きがたく見たまふ。

この宮ばかりこそおはしけれど、いささかのもの紛るるやうに思しつつくるにも涙のこぼるるを、袖の暇なく、え書きやりたまはず。

・源氏「のぼりにし雲居ながらもかへり見よ我れ秋果てぬ常ならぬ世に」

おし包みたまひても、とばかりうちながめておはす。

三・七「幻」の源氏の独詠から

①春寒の頃紫の上を嘆かせた在りし日を思う

曙にしも、曹司に下るる女房なるべし、「いみじうも積もりにける雪かな」と言ふ声を聞きつけたまへる、ただその折の心地するに、御かたはらの寂しきも、いふ方なく悲し。

・憂世には雪消えなむと思ひつつ思ひの外になほほど降る

②紫の上遺愛の梅をいたわる匂宮（三の宮）を見て悲しむ

二月になれば、花の木どもの盛りになるも、まだしきも、梢をかしう霞みわたれるに、かの御形見の紅梅に鶯のはなやかに鳴き出でたれば、立ち出でて御覧す。

・植ゑて見し花の主もなき宿に知らず顔にて来る鶯

みづからの御直衣も、色は世の常なれど、ことさらにやつして、無紋を奉れり。御しつらひなども、いとおろそかに事そぎて、寂しくもの心細げにしめやかなれば、

・今はとてあらしやはてむ亡き人の心とどめし春の垣根を人やりならず悲しう思さる。

③夏、蝸・螢につけ尽きぬ悲しみを詠む

蝸の声はなやかなるに、御前の撫子の夕映えを独りのみ見たまふは、げにぞかひなかりける。

・徒然とわが泣き暮らす夏の日をかごとがましき虫の声かな

螢のいと多う飛びかふも、源氏「夕殿に螢飛んで」と、例の。古言もかかる筋にのみ口馴れたまへり。

・夜を知る螢を見ても悲しきは時ぞともなき思ひなりけり

注―「長恨歌」の玄宗皇帝が、亡き楊貴妃を偲ぶ条に「夕殿に螢んで思

ひ悄然たり・・・」から。

④七夕の深夜、独り逢瀬の後の別れの涙を詠む（「長恨歌」を踏まえる）
夜深う、一とこり起きたまひて、妻戸押し開けたまへるに、前栽の露い
としげく、渡殿の戸より通りて見渡さるれば、出でたまひて、

・七夕の逢ふ瀬は雲のよそに見て別れの庭に露ぞおきそふ

⑤秋、雁によせて亡き魂の行へを思う（「長恨歌」を踏まえる）

神無月は、おほかたも時雨がちなる頃、いとど眺めたまひて、雲居をわ
たる雁の翼も、うらやましくまもられたまふ。

・大空を通ふ幻夢にだに見えぬ魂の行く方たづねよ

何事につけても、紛れずのみ月日にそへて思さる。

⑥一年を終え、涙ながらに紫の上の文殻を焼く

ましていとどかきくらし、それとも見分けかれぬまで降りおつる御涙の
水茎にながれそふを、人もあまり心弱しと見奉るべきがかたはらいたう
はしたなければおしやりたまひて、

・死での山越えにし人を慕ふとて跡を見つともなほ感ふかな

いま一際の御心惑ひも、女々しく人わるくなりぬべければ、よくも見た
まはで、こまやかに書きたまへるかたはらに、

・かきつめて見るもかひなし藻塩草おなじ雲の煙とをなれ

と書き付けて、みな焼かせたまひつ（「竹取物語」を踏まえる）。

⑦歳暮、年も我が世も果てることを思う

年暮れぬと思すも心細きに、若宮（匂宮）の、「雛やはらむに、音高かる
べきこと、何わざをせさせむ」と、走り歩きたまふも、をかしき御有様
を見ざらむ事とよろづに忍びがたなし。

・もの思ふと過ぐる月日も知らぬ間に年も我が世も今日や尽きぬる

この歌を最後に「雲隠」に入る。

四・おわりに

源氏の正妻の葵上が夕霧出産後亡くなり、紫の上が明石の姫君（後の
中宮）の養育など行ってきた。その後の六条院での生活が一番よき思い
出になる。晩年になって、源氏が、朱雀院の女三の宮を正妻に受け入れ
ざるを得なくなったことで、正妻でないだけに紫の上の悩みが大きく、
それが遠因となって亡くなる。源氏にしても、不本意な女三の宮との結
婚が、薫出産で桐壺帝と同じ運命を背負うことになり、これを受け入れ
ながら、紫の上を慕うことで終わっている。

五・参考文献

- ①角田文衛「源氏物語千年記念 紫式部伝」法蔵館（二〇〇七）
- ②瀬戸内寂聴全訳「源氏物語」講談社文庫（二〇〇八）
- ③伊藤博校注「紫式部日記」岩波書店（一九八九）
- ④相馬大「小倉百人一首 二十一人の女流歌人」同朋舎出版（一九九四）
- ⑤戀塚稔「百人一首 二十一人のお姫さま」郁朋社（一九九二）
- ⑥山中裕、秋山虔、池田尚隆、福永進校注・訳「栄花物語」小学館
（一九九八）
- ⑦阿部秋生、秋山虔、今井源衡、鈴木日出男校注・訳著「源氏物語」小学館（二〇〇二）
- ⑧紫式部ゆかりの地関連ホームページ